

# 文化

## 復帰前後

### つなぐ言葉

— 往復書簡



おおた・まさひで 1925年久米島生まれ。大田平和総合研究所主宰。元沖縄県知事、前参議院議員。

## 大田 昌秀

お手紙ありがとう。まず最初に一言、貴女が「ウシ」と名乗り、「カマドゥー小の会」を組織して基地問題などで活躍していることをうれしく思います。戦前に「方言撲滅運動」と軌を二にして、沖縄では改姓運動が起き、すべての「沖縄的なもの」は劣悪だとして抹殺されました。政府や県当局の指示によるもので、地元の指導者

たちは皇民化を急ぐ余り、積極的にそれに呼応。その結果、女性たちは、ウシとかカメ、カマドといった名前を恥じて本土的な名前に変えました。若い世代の貴女があらえて「ウシ」と名乗るのはユーモラスで、貴女の社会変革への意志が感得できます。さて「復帰後40年」の節目を迎え、「日本復帰」とは何であった

かがいや応なしに問われることも、沖縄は基地移設問題をめぐって、将来を見据えた主体性が問われています。その点との関連で、貴女は私の「醜い日本人」という本を読み、その論旨は現在も通用すると言ひ、何故に沖縄の人々は日本復帰を望んだのか、と問うています。お答えする前に付言しますと、私は「醜い日本人」を書く前に、自己批判の本として1967年に弘文堂新社から「沖縄の民衆意識」という本を出しました。それを一読されたら、伊波普猷やその弟の普成(月城)が「沖縄人の最大欠点」として酷評した私たちが自身の主体性のない事大主義的生き方がいかなるものであったか、判然とすると思います。復帰運動の過程では、復帰の内実が人々の志向したものと違い過ぎるため、思想的観点から「反復帰論」なども論じられました。こうして復帰をめぐることは、さまざま議論が表面化しました。一言

た。ついで基地から派生する事件・事故の多発や土地の強制収用なども絡んで、沖縄の人々の基本的人権が無視されると、「異民族支配からの脱却」というスローガンが強調され、あけく「平和憲法の下へ帰る」「核抜き本土並み」といった主張が唱導されました。中心になったのは、地元指導者や教職員会、組織労働者などでした。

ところが、いざ復帰してみると、あらゆる意味で期待外れとなり、第二、第三の「琉球処分」だと大方の怒りを買い、日本国家や平和憲法に幻想を抱いたとして、運動をリードした人たちが批判されるに至ったのです。

# 「平和憲法」「核抜き」「願う 現実には「琉球処分」の再来

戦前の日本人にされたまま、敗  
う感覚があったのでしょうか。

## 知念ウシ ↑ ↓ 大田昌秀 (上)